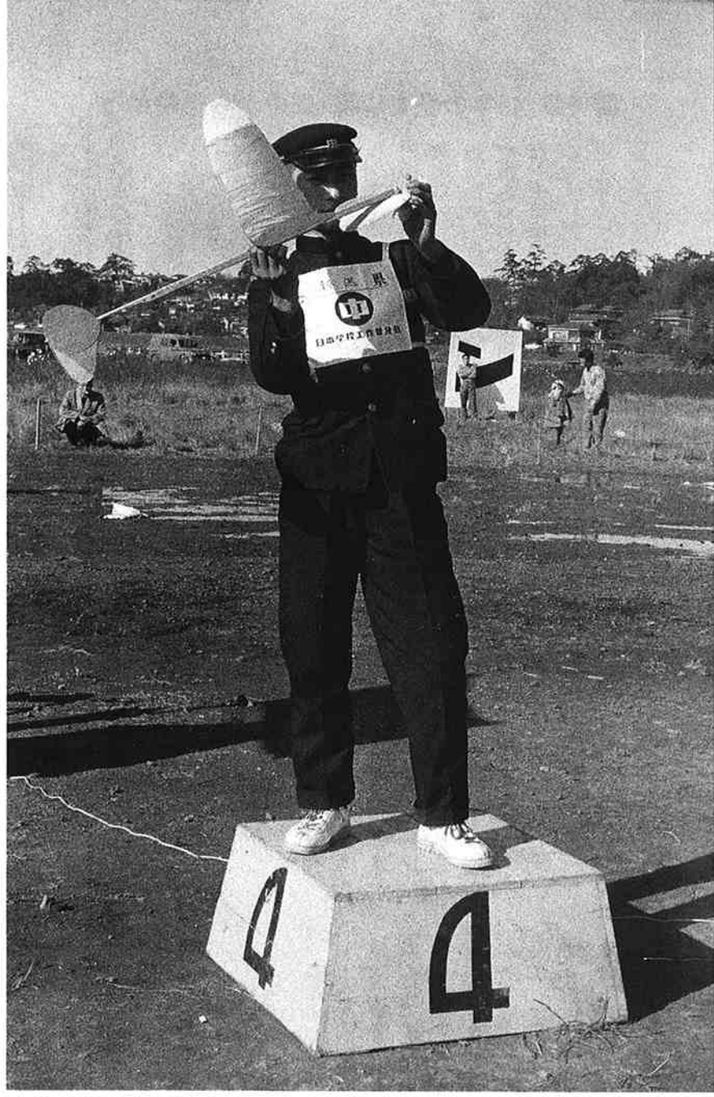
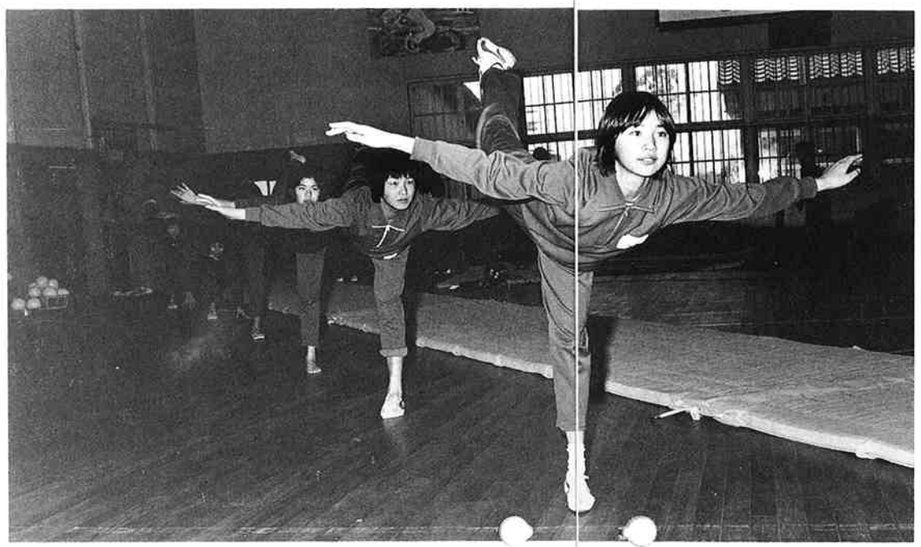
思い出を振り返って

四十六年の歴史を刻んできた長浦中学校。その歴史の中に、卒業生の思い出が一杯詰まっています。その中から、思い出の場面を拾ってみました。

いつまでも心の中に残るように……。



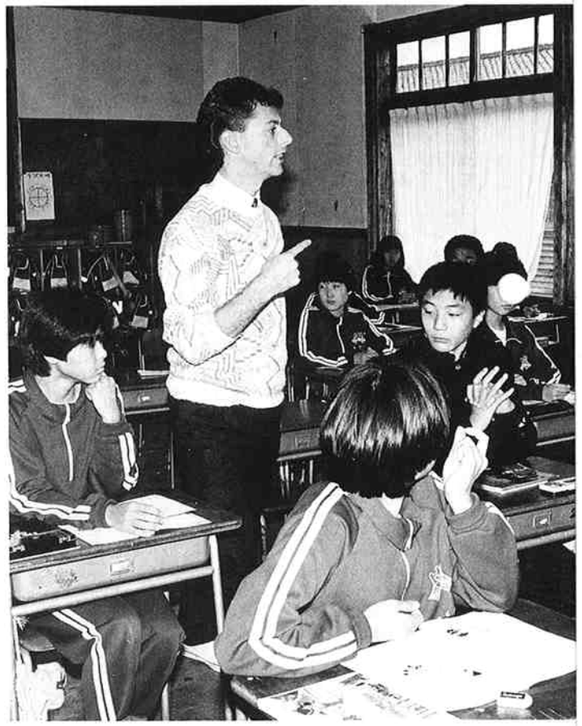
▲模型飛行機で全国大会へ（昭和30年ころ）
家弓先生の指導で、メキメキ上達。全国大会へ３回出場の栄光に輝く。



▲県大会連続出場の記録を持つ体操部
冬休みも返上して練習（昭和56年）

▲芸能発表会（昭和60年）
太郎冠者、次郎冠者の名演技

▶長浦中運動会（昭和30年ころ）



▲英語の授業に外国青年（平成元年）

ある決心

「協力しない人が出たらどうする」と鋭い質問がとぶ。（2/9 農業団体役員合同会議で水田営農活性化対策で豊栄独自の生産調整対策を提案して）

心配するのは当然だ。誰しも心の中ではそれを一番危ぶんでいることなのだから……。

胃がまっ黒になって収縮していくような感じにとらわれながら、あえて言う。「協力しない人があるとは考えていない。罰則等の強制力はない。皆んなが協力するということが保証だ。確認をして始めたい。二度とないチャンスを生かすかどうか、我々の決意次第だ」と。

幾度かこんな決心の仕方があったと思う。農業共済組合の合併問題の時も、北部工業団地造成の時も、いつも「失敗したらどのような責任をとるか」と問われる。答え方はきまっている。

「失敗は考えていない」

潔いようだが、それしか答えがないのである。

今、思うこと

市長　小川竹二

幾代も続いた農業が「滅びる」とは誰しも信じ難い。しかし今日の状況ではありうること。特に豊栄の農業にはもはや後がないといえる。

一致協力をして打開を試みざるを得ずしてと切歯扼腕（せっしやくわん）の思いがする。（2/19 豊栄市農業を考える会で）

「豊栄病院を考える集い」のパネラーとして出席する（2/27）

厚生連豊栄病院を移転改築をする計画（平成五年設計、六、七年建設という中期経営計画）は延びるかもしれないという。

市の施策は「保健・医療・福祉」と一体となったもの、病院はその中核となる。他の計画との整合性もあるので遅れるのは困る。市民から建設運動に参加してもらい前進させたいと発言。

豊栄病院は地域住民のニーズに応えてこそ成り立つ。又、市民も病院づくりに参加して、自分たちの病院として利用しなければならない。どちらからも取り組みが遅れていたのではないかとみんなで確認。有意義な集会であった。

冬の北海道名寄市で、第六回全国青年市長会にOBとして出席する（2/14～2/14）討論テーマは「今、地方の時代」。夜、市民の一大イベント「北の天文字焼き」に参加。暗闇の山腹に巨大な『天』の火文字が浮かびあがる。市民の一致協力した熱い思いが厳寒の中でも、伝わってくる。こんな元気なまちもあるのだ。